

照葉樹林にフウリンゴケ見つかる

著者	土永 浩史
著者別表示	Doei Hiroshi
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	38
号	1
ページ	21-21
発行年	1990-06-25
URL	http://doi.org/10.24517/00055945



- Vol. II. British Museum, London, p. 9.
 KIRTIKAR, K.R., BASU, B.D. and AN, I.C.S. 1903.
 Indian medicinal plants, Vol. 1, 2nd ed., Lalit
 Mophan Basu, Allahabad, India.
 NADKARNI, K.M. 1954. Indian Materia Medica,
 Vol. 1. Third Ed. Popular Book Depot.,
 Bombay, pp. 23, 25.
 NAMBA, T., 1980. Coloured illustrations of
 Wakan-yaku, Vol. 1. Hoikusha, Osaka, p. 92.

摘 要

ネパールにおける伝統医療はアーユルヴェーダ（インド医学）に依っている。同医学で使用される薬物の一種に Nirbisi あるいは Nirmashi と称されるものがあり、解毒薬として古くから用いられ、その基源はキンポウゲ科の *Delphinium* 属植物の地下部であるとされてきた。しかし、今回ネパールの各地生薬市場で入手した Nirbisi は、その外形から同科の *Aconitum*（トリカブト）属植物の塊根であると思われる、解剖学的にもよく一致した。

一方、ネパールには 30 種以上のトリカブト属植物が分布しており、その多くが民間薬として利用されていると考えられるが、生薬学的な研究はきわめて少ない。今回ネパール中部で採集することが出来た *A. orochryseum* の内部形態の詳細については未記載であったので、その母根および子根の内部形態を検討し、市場品と比較したところ、2 カ所の市場品が本種に一致した。それ以外の市場品も明らかにトリカブト属植物であったが、種のレベルで異なるものであった。トリカブト属植物の内部形態に関する過去の報告内容が断片的であるため、今回の不明種については十分な対比が行えず、それらの基源については今後の問題とした。

いずれにせよ、ネパール産の Nirbisi あるいは Nirmasi と称される生薬は、従来云われてきた *Delphinium* 属ではなく、トリカブト属植物の塊根であり、それには *A. orochryseum* も利用されていることが本研究で明らかになった。

(Received December 15, 1989)

○ 照葉樹林にフウリンゴケ見つかる（土永浩史）Hiroshi DOEI: *Bartramiopsis lescurei* (JAMES) KINDB. Found in the Lucidophyllous Forest in Wakayama Prefecture

フウリンゴケはスギゴケ科に属する蘚類で本邦産 1 属 1 種である。本種は茎が細長く、葉鞘部に数本の長い多細胞の毛をもつことで、胞子体がなくとも他の種と容易に区別することができる。蒴があれば、蒴歯をもたないことも大きな特徴とされる。国外ではカムチャッカ、シベリア、北米に分布し、日本では北海道から九州の亜高山から冷温帯にかけて生育している。近畿地方では大台ヶ原・大峰山のほかには知られていなかった。

1989 年 9 月 10 日、和歌山県西牟婁郡大塔村前ノ川国有林において本種を見出したので記録しておく。生育地は日置川の上流、大塔村木守から東に入った大塔山の山麓にあたる前ノ川の標高約 560 m の地点である。溪流沿いの岩壁にみられ、岩の割れ目などに数個のマットを形成していた。胞子体は見られなかった。この谷底にはタチハイゴケ *Pleurozium schureberi* (BRID.) MITT. やオヤコゴケ *Lophozia cornuta* (STEPH.) HATT. などの亜高山生の蘚苔類も見られ、植物地理学的に非常に興味ある地域である。

本種は通常は亜高山の針葉樹林帯から冷温帯の落葉広葉樹林帯にかけて見られる種で、本地域のようにウラジロガシ、アカガシ、ツクバネガシを主体とした照葉樹林に生育している例はないのではないと思われる。この周辺地域の大塔山系では高等植物においてもヒメイワカガミが標高約 300 m まで下降しているなど北方系の種と南方系の種が混在して見られ、複雑なフロラを示している。しかし残念なことにこの前ノ川国有林は現在伐採中で無残な姿をさらしている。なんとかこの貴重な地域を保護する手ではないものかと考える。

Specimen examined. Honshu, Wakayama Pref., Nishimuro-gun, Ohto-mura, Maenokawa National Forest, ca. 560 m alt., on wet rock near stream, Sept. 10. 1989. H. DOEI no. 12037.

(〒648 橋本市古佐田 和歌山県立橋本高等学校 Wakayama Prefectural Hashimoto Senior High School, Kosada, Hashimoto 648)

○ 根井正利 分子進化遺伝学 平成 2 年 2 月 5 日発行。A 5 判、433 頁、培風館発行。定価 7910 円。

本書は、1987 年に出版された Molecular Evolutionary Genetics (Columbia University Press) の日本語版である。分類学者にとって、特に参考となるのは、第 11 章（系統樹）の部分であろう。私を含め、日本の一般的な分類学者のこの分野に対する知識とえば、“アミノ酸と塩基の置換速度は近似的に一定であり、系統樹の作成の優れた道具となる”という基本的な枠を出ないものではないかと思う。分子情報から系統を構築するにあたり、どのような系統作成法があり、各方法はどのようなケースに最も適しているかといった最新の知識は、